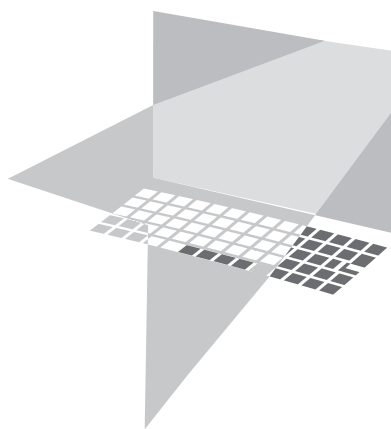


第5章

# インタビュー調査の 結果から

野澤 亜伊子



## 第1節

# インタビュー調査の概要

質問紙調査に具体性を付け加えるために行ったインタビュー調査では、子どもが身近な人から使い方や使いみちを教えられながら携帯電話やパソコンに慣れていく様子や、大人からの規制が腑に落ちない子どもの気持ちが見えてきた。

### 調査の目的

質問紙調査によって、子どものICT利用について定量的に明らかになった。携帯電話は小学生ではとくに都市部において浸透が速く（第1章第1節参照）、パソコンは学校段階や地域に関係なく広く利用されているようである（第2章第1節参照）。社会的にも取り上げられる機会の多い携帯電話と、生活のあらゆる場面で活用されているパソコンについて、さらに具体的なエピソードを収集するためインタビュー調査を実施した。調査の設計にあたっては、目的を次の3つに設定した。

1. 質問紙調査の結果を具体例で裏付ける
2. コミュニケーションや学習の視点から、携帯電話やパソコンの特性をあぶり出す
3. リスクに対する子どもの認識やリテラシーの内容を調べる

なお、インタビュー調査では、できるだけ多様な意見を募り、実態を探ることを目指した。そのため、ここでの調査結果は代表性のあるものではないことを、はじめにおことわりしておきたい。

### 調査の方法

株式会社日本リサーチセンターに調査の企画の共同設計と実際の運営を依頼し、東京都内のインタビュールームでグループインタビューを行った。

### 対象者

小・中・高校生を通して携帯電話やパソコンの利用についてたずねるために、学校段階ごとに1グループずつ設定した。ただし、中学生に関してはさらに1グループ追加して、携帯電話やパソコンのハードユーザーの実態を把握することにした。質問紙調査から明らかになった中学生の特徴や他のグループとのかねあいから、ハードユーザーの基準は、携帯電話では友だちへのメール送信の回数の多さ、パソコンでは利用機能の多さとした。

また、インタビュー調査の対象者は、質問紙調査とは別に抽出して調査の依頼をしており、すべて公立学校の児童・生徒とした。なお、対象者の基本条件は以下のとおりである。

- ①自分専用の携帯電話を所有していること
- ②自宅にパソコンを所有し、本人も利用していること
- ③中・高校生については、携帯電話とパソコンの次の機能のいずれかを利用していること
  - ・携帯電話：メール、カメラ機能、音楽ダウンロード、ネット検索、動画を撮る、ゲーム
  - ・パソコン：動画共有サイト、音楽ダウンロード、オンラインゲーム、オンラインでないゲーム、電子メール

基本条件に加えた各グループの条件は、以下のとおりである。

小学生グループ	携帯電話のメールを月に1回以上は送る
中学生標準グループ	友だちに携帯電話のメールを1日に5～25回程度送る
高校生グループ	
中学生ハードユーザーグループ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・半数は「携帯ハードユーザー」：友だちへの携帯電話のメールを1日に50回以上送る</li> <li>・半数は「パソコンハードユーザー」：前述のパソコン機能の多く（最低2種類以上）を利用している</li> </ul>

### 対象者抽出方法

株式会社日本リサーチセンターが提携するリクルートネットワーク（リクルート業者・個人のリクルート事業主）を介し、前述の基本条件・グループ条件に関する質問を電話で聴取したうえで、条件に合う対象者を集めた。

### 対象者属性と調査日程

対象者属性と調査日程は以下の表のとおりである。

	人数	人数の内訳		居住地域	調査日程
		学年	性別		
小学生グループ 	6人	5年生	男子2、女子1	東京都を中心とする首都圏	2008年 12月13日
6年生		男子1、女子2			
中学生標準グループ 	5人	1年生	男子1、女子2		2008年 12月13日
2年生		男子1、女子1			
高校生グループ 	6人	1年生	男子1、女子1		2008年 12月14日
2年生		男子2、女子2			
中学生ハードユーザーグループ 	6人	1年生	男子1、女子1		2008年 12月14日
2年生		男子2、女子2			

## 第2節

# 携帯電話の使い方

携帯電話の使い方をみると、小学生は家族中心にコミュニケーションをとるのに対し、中学生は友だちとのメールを重視し、高校生はさらに多機能を使いながら交友関係を広げている様子である。また、学校からの指導には一定の効果がある。

### ●携帯電話を玩具的に利用する小学生

質問紙調査によれば、通話やメール以外で小学生が携帯電話でもっともよく使う機能は「カメラで写真をとる」、次が「動画（ムービー）をとる」であった（第1章第1節参照）。小学生では子ども用の携帯電話でインターネット接続が規制されているケースもあり、シンプルに使っているようである。では、携帯電話のカメラや動画の機能を使って何をしているのだろうか。



友だちが来たときに画像の交換をしたり、遊びから帰って、「今日楽しかったね」という感じでメールする。(小学生女子)



飼っている猫のかわいいポーズを撮る。家で〔家族に〕「こんなにかわいいの撮ったんだよ」と見せる。(小学生男子)

携帯電話で撮った写真を友だちと交換するという発言は、男女ともにみられた。また、女子では男子に比べ、メールの重要性が高い様子だ。なお、今回のインタビュー調査では、男子よりも女子のほうが子ども用の携帯電話を利用するケースが多く、ダウンロードのようにインターネット機能を使うのは男子のほうがさかん、という声もあった。また、音楽の有料ダウンロードをしているのは男女各1人ずつであった。

### ●メールを駆使する中学生、多機能を使う高校生

中学生になると、メールのやりとりが利用機能の中心になることに加え、インターネット検索やブログ・プロフの利用も活発になる様子がみられた。携帯電話でテレビを見ているケースもあった（中学生男子、複数）。高校生では、「自分の趣味関係の情報を検索する」（高校生男女）や「SNSの学校のコミュニティで友だちを見つけたりする」（高校生女子）といった声が聞かれた。

また、有料サービスの利用としては、音楽ダウンロードのほか、一部ではインターネットショッピングの利用もみられた。



インターネットショッピングでマフラーを買った。(中学生ハード女子)



オークションサイトでライブのチケットを買う。(高校生男子)

## ●機能や操作は使いながら覚え、サイトの情報は友だちからもらう

操作スキルは自分で試しながら覚え、個別サイトの情報等については、友だちやきょうだいかから学習することが一般的である。中学生では友だち経由でサイトの情報をやりとりする機会が増える様子だ。



使い方はいじっていればわかる。友だちの携帯でも何となく使い方がわかるので教えてあげることもある。(小学生女子)



自分の好きなアーティストの画像が欲しいとき、友だちに頼んだらその画像が取れるサイトを送ってくれる。(中学生標準女子)

ほかにも、興味を引くサイトを求めてバナー広告にアクセスする態度もみられた(中学生ハード男子)。また、メールの文字や背景をデザインするための無料サイトを紹介している雑誌も情報源として使われていた(中学生標準女子)。

## ●生活に密着する携帯電話

在宅時の携帯電話の置き場所は、中学生標準グループの2人をのぞき、ほとんどのケースで自分の部屋である。プロフやメールを頻繁に利用するケースでは常に手元に持っていた。また、お風呂で音楽を聴くために防水の携帯端末を買ったという声も聞かれた(高校生女子、複数)。さらに、中学生ハードユーザーグループの一部では、食事中にメールをしたり、メールのために深夜まで起きていたりする様子もうかがえた。



家族に注意されるけど構わず、食事中も右手で食べて、左手でメールを打つ。メールが来たら、絶対早く返信しなくちゃと思う。勉強中も同じ状態で、右手は鉛筆。(中学生ハード女子)



メールのやりとりがある間はずっと寝ずに続ける。深夜になることもある。(別の中学生ハード女子)

中学生になるとコミュニケーションツールとしての重要度が増し、帰宅後も常に携帯電話が気になるようだ。この傾向は中学生以上の女子でとくに目立つ。小学生でも、周囲に携帯電話利用者が多い女子では、この傾向がうかがわれた。



メールが来たら勉強は中断する。(中学生以上のほとんど)



メールを出すと必ず返事が返ってくるので途切れるまでは続ける。勉強中でも、自分の部屋にいたらずっとメールをして、途切れたら元の勉強に戻る。(小学生女子)

一方、高校生グループの女子の一部で、勉強に集中するため携帯電話を意識的に排除する態度がみられた。



勉強のときは集中が途切れたらいやなのでベッドの上に放り投げてある。  
(高校生女子)



勉強しているときは集中が途切れたらいやなので、常に電源を切って他の部屋においておく。(別の高校生女子)

### ●家庭外の利用が増える高校生

高校では、中学校までと違い、学校への携帯電話の持ち込み禁止という制約がなくなる場合が少なくない。通学などの移動時間も長くなるため、今回の対象者では、家庭外での利用を主とするケースが半数みられた。また、家の内外を問わず頻繁に利用するといったケースもあった。



メールは電車の中や夜寝る前に使うので、帰宅後寝るまでの間はあまり使わない。  
(高校生女子)



家にいるときもポケットに入れている。授業の合間やバイトの休憩のとき、家でも結構いじる。(高校生男子)

### ●学校の指導が広まる

一般的に小・中学校は有害サイトやチェーンメールに関して指導しているようで、子どもたちも指導の内容をきちんと理解している様子だった。学校段階でみると、小学生グループでは、セーフティ教室で携帯電話に触れている様子が何件か聞かれた。中学生グループでは学校への持参が禁止されているケースが多い様子だが、利用のしかたについての指導は、チェーンメールへの注意以外、受けたとしてもあまり印象に残っていないようだった。今回のインタビュー調査の高校生グループでは、すべて学校への持参は自由であるとのことで、「授業中に使わない」という点以外の指導はほとんど聞かれなかった。



セーフティ教室で「チェーンメールに返さない」「有害サイトに行かない」と教えられている。(小学生女子)



知らない人からメールが来て〔会いに〕行ったりするのはやめましょう、チェンメはすぐ先生に見せましょう、と言われていた。チェーンメールについては守っていないが、知らない人と出かけることは絶対しない。(中学生ハード女子)



携帯電話依存症になるな、深夜までやるな、と言われていた。(中学生ハード男子)

### ●「なりすましメール」によって不快な経験

メールによるトラブルや不快経験として思いつくものをたずねると、中学生以下のどのグループも第1に挙げるのはチェーンメールであり、対象者本人も経験している人が多かった。しかし、学校が対処法を指導していることもあり、深刻に受け止める様子はなかった。

「なりすましメール」による嫌がらせも、中学生では身近なトラブルであるようだ。また、「なりすましメール」のサイトについて高校生グループの半数が認知していた。



「なりすましメール」がある。どの友だちがやっているのかは大体見当はつく。噂で聞く。(中学生ハード女子 複数)



「なりすましメール」ができるサイトは知っている。中3の頃に、友だちがそれを使って、結構人間関係が気まずくなったのを覚えている。(高校生男子)

### ●一時的に納得する姿も

プロフをめぐる問題が発覚すると、その問題への個別対応として、学校側から事後注意が出ているようだ。しかし、「なぜ問題なのか」が子どもたちに必ずしも十分には理解されていない様子がうかがわれた。



プロフは禁止されているが、みんなやっている。(中学生標準女子)



プロフに画像 [自分の写真] を貼り付けていることを学年集会で注意された。個人情報？何でダメとは言っていない、なぜダメなのかよくわからなかった。しつこく言われたのでやめたが、納得していない。学校側で言う問題じゃない気がする。(中学生ハード女子)



プロフでのいじめをするなど学校で言われているが、守られてない。特定の個人名を掲示板に出したり、プロフを貼り付けたりという形のいじめ。(高校生女子)

### 第3節

## パソコンの使い方

どのグループでもパソコンで動画を見ており、パソコンを使った学習を楽しむ姿もあった。学校ではパソコンを使うときの一般的なルールのほかに、個別の事例について注意があるほか、家庭でも小・中学生にはルールが決められているようだ。

### ●小学生も動画共有サイトを利用

学校段階を問わず、どのグループでも、動画視聴はパソコン利用の大きな目的となっており、これに加えて、中学生以下のグループはオンラインゲームもよく利用していた。中学生以下では楽しむためにパソコンを使うのに対して、高校生では、情報検索やインターネットショッピング、ブログの閲覧など、情報機器としての利用が中心になる。



パソコンでブログを見るのは、パソコンでしか見られないタイプの友人のプロフやブログや、有名人のブログ。(高校生女子)

### ●パソコンでの学習はおもしろい

パソコンを利用した学習ソフトは、小学校の「総合的な学習の時間」や中学校での副教材として、あるいは家庭学習教材の形で利用されているようだ。学習ソフトを使っている子どもは、おもしろく取り組める点で好意的な態度を示していた。また、小学生の一部では、保護者がパソコンを使った学習ソフトを勧めたケースもみられた。



学校の授業で時間が余ったときにタイピングソフトをやる。(小学生男子)



親に言われて教科の学習ソフトをやっている。教科書でやるよりおもしろい。(小学生男子)



日直のとき、最近のニュースを取り上げて感想を書かなければならない。新聞だと字がいっぱい並んでいて漢字がいっぱいあるから、どの内容にするかだけでも疲れるし、テレビのニュースはアナウンサーの言うことをメモを取るのが大変。インターネットはいつも自分が遊び感覚で使っているものだから気軽にできる。(小学生女子)



中学生からは、気軽にできるメリットだけでなく、音声や動画を使うことでわかりやすいという点も評価されていた。高校生では、中学時代に利用した人はいたが、現在利用しているケースはみられなかった。また、パソコンを立ち上げる手間を嫌う声も聞かれた。



CD-ROM [の教材] をやった。気軽にできて堅苦しくない。絵があるし動くのがいい。あればもっとやりたい。(中学生標準男子)



書かないですむ点はよかったが、パソコンを立ち上げるのが面倒で長続きしなかった。(高校生男子)



中学校のとき使った天体のソフトは、天体の動きがリアルにわかってよかった。でもそのほかのソフトはあまりおもしろくなかった。今は使ってない。(高校生女子)

### ●学校の指導は一般的な注意だけでなく、事例に応じた取り組みも

有害サイトやウイルスの危険から身を守るためのルールは、ほぼ一般的に理解されている。また、個別の問題が起きたときに学校からの注意が出ている様子が見られた。



「有害サイトにいくな」ということは言われる。(複数)



ゲームにこっそりお金を使っていた友人が、親にばれて、親が学校に連絡したので、学校が学年集会を開いた。(中学生ハード男子)



学校の悪口を書く掲示板ができて、個人が特定できるような内容がたまたま書いてあったので、全校に注意が出た。(高校生女子)

しかしながら、学校でのリテラシー教育の機会があっても、適切なタイミング・内容でなかったために学習されなかったケースもあった。



小3の時に46個ぐらい守るべきことを書いたプリントを渡されたが、漢字が難しく読めなかった。内容を覚えていない。(中学生標準男子)

### ●家庭の指導は学校段階があがるにつれて弱くなる

小学生グループや、中学生でも親との結びつきが強いケースでは、見てよいサイトを保護者が決めたり、1人では使わせないなどの制約をもうけたりしているようだ。中学生以上では、有害サイトに関する注意以外は聞かれなかった。



勝手に自分のメールアドレスを変えたり、チャットみたいなメールが入ってくるところをいじったりしてはいけない、親がOKしてないところは絶対触るなと言われている。小学生だから有害サイトにつなぐことがありうると言われた。(小学生女子)



「買い物かごに入れる」とか「買う」とかを押さないでくれと言われている。(小学生男子)

## 第4節

# コミュニケーション手段の選択の理由

インタビュー調査に参加した中・高校生を対象に、質問紙調査と同じ質問をして、場面に応じたコミュニケーション手段を選ぶ理由をたずねた。気軽なメールでは相手に悪いから対面を選んだり、あえて距離をとるためにメールを選んだりするという声があった。

質問紙調査では「あなたは次のようなことをするとしたら、どのような方法を使うと思いますか」とコミュニケーション手段の選択に関してたずねた（第3章第4節参照）。場面は「親しい友だちを遊びに誘う」「あまり親しくない友だちを遊びに誘う」「好きな人に告白する」「相手に対する不満を伝える」「親に謝る」の5つを設定し、方法は「直接話す」「電話で話す」「メールを送る」「手紙を書く」「その他の方法を使う」を選択肢とした。そこで、インタビュー調査では、メールを選んだ理由を中心に、こうした5つの手段の選択の背景にある意識を探った。

### ●心理的な距離が近いからメールを選ぶ子どももいる

「親しい友だちを遊びに誘う」手段として選んだのは、「直接話す」「電話で話す」が多かった。親しい友だちであれば、学校でふだん接しているのであえてメールにする必要がなかったり、今の都合を聞くためにはメールだとタイムラグが起こったりするためである。

ただし、中学生ハードユーザーグループでは「メールを送る」を選ぶ人が6人中5人と多く、残りの1人は「電話で話す」を選び、「直接話す」を選んだ人はいなかった。このグループでは親しい友だち関係がメールを主体に動いていることがわかる。

次に、「あまり親しくない友だちを遊びに誘う」手段をたずねたところ、各グループから、グループの特質というよりは個人の性格に帰すると推察される、さまざまな意見が聞かれた。

①親しくない友だちには気後れして直接話しにくいから、「メールを送る」を選ぶ。



親しい友だちは何でも言えるけど親しくない子は話しかけにくいからメールのほうが楽。(中学生標準女子)



不意に電話して、話が弾まなかったら嫌だから、親しくない友だちとはメール。(高校生男子)

②「メールを送る」のは気楽でカジュアルな手段なので、親しくない友だちに対しては失礼と考えたり、親しくない友だちと親しくなったりするため、「直接話す」ことを選ぶ。



親しくない友だちだとメールじゃ悪い。(中学生ハード男子)



直接話して〔友だち関係の〕レベルを上げようみたいと思う。(中学生ハード女子)

③「親しい友だち」と区別された「あまり親しくないがキープしておきたい友だち」へのコミュニケーション手段として、距離感のある「メールを送る」を選ぶ。



学校ではあまり話さない友だちだから、たまにはメールで誘うかな、と思う。  
(高校生女子)



親しくない友だちは、遊びに誘ったのに「行ってやる」みたいな態度に出られる可能性が高いので、直接話すのではなくメールにする。そのほうが話が早い。  
(中学生標準男子)

### ●考えをきちんと伝えるときは「直接話す」

「好きな人に告白する」「相手に対する不満を伝える」場面は、自分の考えをきちんと伝えなければならない重要な場面であり、多くのケースでこの2つへの手段選択は一致していた。大半は「直接話す」を選んでいるが、中学生ではメールを「もっとも個人的、親密なコミュニケーション手段」と受け止めている様子が一部で見られ、相手本人にだけ伝えたい内容はメールを選ぶという声もあった。高校生では「好きな人に告白する」ときに「電話で話す」を選ぶケースがみられた。

「電話で話す」や「メールを送る」を選ぶのは、「直接話す」と緊張して言いたいことをうまく伝えられないという恐れからであり、相手の否定的な反応に直面するのを避けたいという態度の表れようだ。この場合、メールは直接対面せずに相手の反応をうかがうために利用される。一方、口頭のコミュニケーションよりも、文章にしたほうがきちんと感情を伝えられるという積極的な理由でメールを選んでいる場合もあった。



直接だと言葉に詰まってしまうからメール。(中学生ハード男子)



告白するのに直接は、周りに冷やかされたりするのがいや。手紙も残るからいや。メールはその本人しか見ないから、メールがいい。(中学生標準女子)



告白してダメだったら気まずいから、電話がいい。(高校生男子)



不満を面と向かって言うのは言いづらいからメールがよい。(高校生女子)

### ●「親に謝る」ときは直接

「親に謝る」場合には、ほとんどすべてのケースで「直接話す」が選ばれており、一部の間接的な手段を選んだ少数意見は、直接対話を苦手と自覚しているケースだった。



直接だと、反発してしまって素直に言えない。(中学生標準女子)



直接話すのはあまりうまくない。直接だと許してもらえなさそう。(中学生ハード男子)

## 第5節

# 携帯電話メールの利用と背景

携帯電話メールを使ったコミュニケーションの行動や意識にはどういった特徴があるのだろうか。子どもたちには、友だちからのメールにはすぐ対応するという規範があり、その背景としては親近感を増すという携帯電話の特性があるようだ。

### ●メールにはすぐに返信すべき

中・高校生のほとんどで、来たメールには返事を「すぐに返さないと相手に悪い」（中学生、多数）という態度がみられる。メールは短文であるため、些細なことを頻繁に連絡している様子うかがわれ、友人関係が頻繁に確認、更新されることになる。このことが、どんなときでもメールをチェック・返信しなければならないという義務意識を生む背景にあると思われる。



ふざけたメールなのに、〔しばらくたってから〕チェックすると、「返信が遅いんだけど」と催促されることがあるので、気をつけている。（高校生女子）



メールに気づかなかっただろうしようと心配で、1時間に6回くらいメールをチェックする。（中学生標準女子）



メールをすぐに返さないと、何で返事しなかったのかと翌日学校で言われる。（中学生標準男子）

### ●メールには絵文字を入れないと「怒っているみたい」

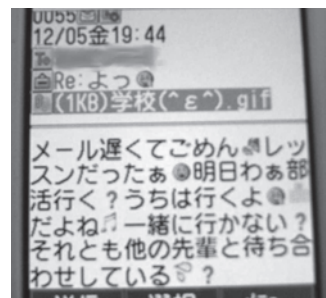
事務的な内容であっても、絵文字が入っていないメールは怒りや冷淡な感情の表明と理解されている。



絵文字をつけないと怒っているみたいで、「何で絵文字つけないの？」ってメールが来る。勘違いさせてしまうから一応絵文字はつける。（中学生標準・ハード女子）



うれしかったときとか、丸で終わると、ちょっと作文っぽい。（中学生標準女子）



●中学生女子の携帯電話メールの例

絵文字は基本的に女子の文化であり、絵文字の使い方が決まっいて、独特のリテラシーが必要であるケースもみられた。



1つのメールに1つくらい絵文字を入れる。男があんまり使うと気持ち悪い。  
(中学生ハード男子)



女子的には〔男子にも〕使ってもらったほうがいい。(中学生ハード女子)



絵文字は、間違った使い方をして「えっ」と思われるのはいやなので使わない。(高校生女子)

### ●微妙なコミュニケーションが必要なときにはメールを使わない

絵文字があらわす感情表現は、そのメールを基本的にカジュアルな印象にする。そのため、関係を悪くせずに不満を伝えるような場合、メールでは難しい。



絵文字をつけたらふざけた感じになるし、絵文字がないと怖い感じになる。不満は伝えたくても怖くはしたくないから、メールは使わない。(中学生ハード女子)

### ●親密感を増すツール

携帯電話を使って友だちや恋愛の話を秘密として共有することで、友だちとの親密感が増す。とくに中学生ハードグループで、人間関係に関する内容が頻繁にやりとりされる状況が目立った。小学生でも女子ではこのような状況が一部にある様子である。



まわりの人に聞かせたくない秘密のこと、たとえばあの人嫌いとか、人間関係のことをメールで話す。(中学生ハード男子)



ドアを閉めても、電話だとどうしても家族に聞かれるか気になるので、家族に聞かれない話はメール。(高校生女子)



俺は関係ないけど、女子たちで「○○いじめよう」というようなメールが回ったことがある。(小学生男子)

また、自身がその悪口に強く関心を持っていなくても、来たメールに「乗っちゃうときもある」(中学生ハード男子)という声も聞かれた。メールへの返信が遅いことは、自分自身が批判を受ける原因にもなりえるため必ずすぐに返信しなければならず、結果として第三者への悪口などが必要以上に増幅する可能性が考えられる。

### ●友だちの情報は緊急性が高いと認識

短時間でおこる友だち関係の変化にすぐ対応するため、子どもたちは「今この時点の友だち情報」にキャッチアップする強い必要性を感じている様子だ。



食事中でもこたつに隠れて携帯をやっている。友だち情報のメールは、そのときにどうしても仕入れたい。(中学生ハード女子)



友だち関係を崩したくないからすぐに返信する。ちょっとしたことでいろいろあつたりするから。食事中でもすぐに返信する。(高校生男子)

## ● タイミングを逃さず連絡

誕生日メールや、プレゼントへのお礼として今の気持ちをすぐに伝えるなど、グリーティングカードのようにメールを利用するケースが女子でみられる。



絵文字や装飾メールで誕生日などお祝いできる。(中学生ハード女子)



お土産をもらって家で開けたら、次の日学校で言うのではなくて、今の自分の「ありがとう」っていう気持ちをメールで伝える。(中学生標準女子)

## ● 気まずいときはとりあえずメール

相手の反応に不安がある場合は、すぐには反応が返ってこないメールのほうがいようだ。



気まずいときは電話をしても、その場でしか話ができないから、ダメならダメ〔で終わってしまう〕。メールなら、相手が怒っているときはすぐに返信してこないけれど、時間がたったら返してくれると思う。(高校生男子)



電話などで話すと反応が気になる。相手が激しく怒っているとあせるので、とりあえずやばいときはメールで謝っておく。(高校生男子)



電話だとやっぱり謝るのに勇気がいる。文章なら伝えやすい。(高校生女子)

## ● メールからトラブルに発展する例も

メールは気軽に打てるうえ、短い言語情報だけであるため不十分な情報になりえるので、トラブルを引き起こすこともある。高校生で、この特性を意識し注意しているケースがあった。



メールでケンカになったことがある。文章なので、ちょっとケンカして絵文字がお互いに少なくなると、ものすごく怒っているように見えたり、すごく冷たい印象になる。それでケンカがヒートアップした。電話なら少しずつ躊躇したりするが、メールは言いたいことがストレートに文章に出るのでよくない。(高校生女子)



メールをしすぎると調子に乗って、友だちの変なメールにも返してしまう。あまり本気で思っていないことでも、指が勝手に動いて打ってしまっていて、ケンカになったことがある。だからそういうことがないように、必要のないとき以外はあまり使わないようにしている。(別の高校生女子)

## ● 相手の都合を配慮する意識も

交流が広がる高校生では、相手の都合に合わせて携帯電話メールを利用することもある。



電話だとだいたいみんな、予定があったりして出られないから、相手が時間が空いたときに返せるメールにする。(高校生女子)



友だちが今日はバイトしているな、というときにはメールにする。(高校生男子)



## ブログやプロフの利用と背景

携帯電話やパソコンからアクセスできるコミュニティサイトでの行動や意識にはどういった特徴があるのだろうか。ツールをとおして交流することで、子どもの心理的な負担が減ったり、友だち同士のコミュニティが支えられたりするようだ。

### ●ゆるやかな結びつきをサポート

自分のプロフィールや、日常生活で落ち込んだ気持ちなどを自ら自己主張しないかたちで表現し、相手から理解されたりサポートされたりすることは、子どもにとって大きな利点である。



学校で仲良くなかった友だちとも、〔プロフを始めて〕仲良くなれた。

(中学生ハード男子、高校生女子)



ちょっと落ち込んでいるときに今の気持ちを書くと、友だちがコメントで励ましてくれたりする、そういうのがちょっと嬉しい。(中学生標準女子)



自己紹介とか、あまりべらべらしゃべることではないが、プロフがあれば、皆に自分はこういう人だよとわかってもらえてよい。(高校生女子)

### ●友だち関係が広がる

現在通っている学校や地域以外に友だちが広がる点も、利点と受け止められている。



コミュニティを使うと、いろいろな人、同じような趣味を持った人と絡むことができ、そこが楽しい。(高校生女子)



他の中学の人とも友だちになれる。学校の友だちと違って、話題がテレビや好きなアーティストのことになるが、相手のプロフに行けば写真が載っているの、対面で知っている友だちとそんなに違う感じはしない。(中学生標準女子)



たまに知らない人が書きこみに来る。そういうのは、友だちも増えるし、その人からいろいろ教えてもらったりするかもしれないからよい。(高校生女子)

また、子どもたちはインターネットを介した関係をどこまで広げるかという線引きもしている。たとえば「友だちの友だち」までは安全圏内にとらえるのに対して、知らない人のプロフやブログにはあまり関心がない様子である。書きこみは危険とっており、とくに「知らない人へのカキコミはしない」というケースが多数みられた。

## ●はじめは自己開示に躊躇する例も

ブログやプロフをとおして個人情報をも自分から開示することについて、利用者の多くは深刻には考えていない。きっかけは友だちというケースが多く、身近に被害の実例がないので自分にも危険が及ぶことはないものと考えよう。ただし、警戒感がまったくないわけではなく、携帯電話の利用に距離を置いている高校生のケースでは、適切に防衛しながら利用する態度もみられた。



友だちに誘われて始めた。友だちと書きこみのやりとりがしたかった。始めることに抵抗は感じなかった。(中学生標準女子)



最初は、プロフが契機の殺人とか変な噂を聞いていたからちょっとためらいがあったが、友だちがやりたがったので始めた。知り合いもやっていて、そんなに危ないのかな、という感じ。自分から知らない人のところにカキコミをしなければ大丈夫だと思った。(中学生ハード女子)



最初は、個人情報が出るのは大丈夫かなと思ったが、ある程度伏せておけば大丈夫かなと思った。たとえばアドレスを載せないで住んでいる場所も特定できないように市までしか載せなければいけなくなって。(高校生女子)

## ●友だちとのトラブルを強く意識

子どもたちにとっては、個人情報の流出にかかわるトラブルよりも、友だちとのトラブルの印象のほうが強いようだ。



誰でも見られる掲示板に自分のアドレスが載せられたことがある。すぐに変更したから問題ないけれど。(中学生標準女子)



学校で何かトラブルがあると、プロフに不快な言葉のアクセスが来る。(中学生ハード女子)



## まとめ

今回のインタビュー調査では、質問紙調査だけではつかみにくい子どもの世界を垣間見ることによって、小・中・高校生なりの言い分や論理を知ることができた。ここでは、このインタビュー調査の結果を簡単に振り返る。

第1に、今回の調査目的は、質問紙調査で明らかになった実態を裏付ける事例を集めることだった。とくに携帯電話を使ったメールに注目すると、携帯電話やパソコンは子どもの生活に深く浸透しているようにみえるものの、学校段階があがるにつれて距離が出てくるようだ。また、学校も指導をある程度行っていることが確認された。

第2の目的は、コミュニケーションの広がりや学習に関する携帯電話やパソコンの特性について把握することであった。まず、携帯電話のメールや掲示板機能によるコミュニケーションは、使える手段をうまく選択して友人関係を良好に築いていけるというプラスの効果があるといえるだろう。とくに対面コミュニケーションに苦手意識のある子どもにとっては大きな武器である。しかし、「すぐに返信すべき」という規範によって、相手のメールにつられて、十分に考えないまま機械的に返事をしてしまう様子もうかがわれた。

また、インターネットの利用で社会への関心が高められる可能性があり、携帯電話やパソコンは子どもたちの視野を早い段階から広げるかもしれない。インターネットは、子どもたちにとってゲームなどの遊びに使うメディアでもあることから、新聞などより気軽な気持ちでニュースに触れることができる。さらに、今回の調査では、学習ソフトを利用している小・中学生が、映像や音声による説明のわかりやすさ、ゲーム的な作りによる取り組みやすさといった利点を指摘していた。ICTメディアについて、今後はこういった使い方を伸ばしていくことも考えられるだろう。

第3の目的は、携帯電話やパソコンに関するトラブルや危険に対する子どもの認識を調べることにより、今後の課題を検討する材料にすることであった。全体を通して、リスク意識が希薄な点に対して、学校側がただ注意を喚起しても、子どもには深刻さが理解できず、十分には納得できない。たとえば「個人情報」という言葉も、彼らのなかで具体的な意味を持たず、それがもたらす被害をイメージできていないように思われた。プロフにしても、自分の情報が不特定多数に向けて公開されているという意識はあまりなく、学校の仲間内の、閉ざされた安全な世界がそのままネット上に持ち込まれている感覚のようだ。

このように、インターネットをとおしたコミュニケーション手段がもたらす利点に比較して、リスクの実感が乏しい現状では、子どもたちに無防備なインターネット利用を留まらせることは難しい。もし、大人が子どもにインターネットを利用するときには気をつけてほしいと思うなら、「何をすると」「どのような過程で」「どのような被害を受けるのか」を具体的に理解させることが重要だろう。まずは、大人が子どもの理屈に耳を傾け、対話をとおして問題を解決していくことが大切ではないだろうか。